

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

NITS・教職大学院・ 教育委員会等	実施機関名・連携機関名 愛媛大学教職大学院 連携：松山市教育研修センター事務所
コラボ研修プログラム	事業名： NITS・愛媛大学教職大学院等コラボ研修
支援事業報告書	研修等名：【NITS・愛媛大学教職大学院等コラボ研修】 学び手の視点で考える道徳学習コミュニティづくり研修
	開催日時：令和5年5月～令和7年2月 開催場所：愛媛大学教育学部、松山市教育研修センター事務所 参加人数（総数）と参加者の属性：総数（90人）5月24日23人、7月5日29人、8月31日11人、12月13日39人、1月24日40人、2月14日11人（学校関係者105人、学生・大学院生11人、教育委員会関係者17名、NPO等1名）

目的：

道徳教育が今次学習指導要領から教科化され、内容項目にあわせて自己を見つめ、多様な考え方に触れながら、よりより生き方や在り方を考えていく「考え議論する道徳」がより求められるようになった。その結果、全国で質の高い実践が多数行われるようになり、一定の成果が出ている。しかし、一方でこれまで同様の読み取り道徳、教師主導の道徳授業も根強く残っており、研修でも、発問や指導方法の伝授に終始し、授業改善や学習者の立場に立った授業づくりの研修は多くない。特に道徳では、自分たちの実践した授業を披露する場に置き換わり、参加者同士が学び合える機会には少ない現状がある。

そこで今回は、教員、研究者、管理職、教育委員会、学生など様々な背景を持つ、専門職学習コミュニティを構築し、道徳の授業づくりではなく内容項目の検討を中核に据え、道徳的価値観について内省を促し、参加者自身が学び手の視点を持ちながら、自身の倫理観を問い直すような研修を設定することを目的とした。この研修を通じて、参加者は、単に指導者や講師から話を聞くだけでなく、参加者同士の思いや考えを共鳴し合うことにより、継続的な内省と探究の重要性を認識し、道徳的価値について深く考え、より良い道徳授業の在り方について、協働的に探究していくことを期待して実施することとした。教師自身が多様な学識専門者と道徳的価値観について議論することは、自立した学習者のモデルとなり、そのことが自身の実践する道徳授業に効果をもたらすばかりでなく、児童生徒もその教師の姿を見ながら、共に考える道徳や共に創る学校・学級を体現していく循環を生み出す契機となると考えている。

内容：

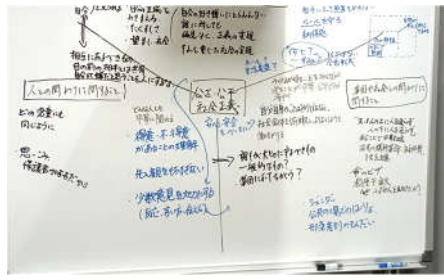
本事業は、学習者が段階を踏みながら、気づきや学びを省察するとともに、自主的な授業づくりへステップアップできるよう、3つのパターンを組み合わせ実施した。1つ目に広島大学大学院教育学研究科准教授の杉田浩崇先生にサポートしていただきながら、参加者同士が道徳的価値観について、対話し学び合うことを中核とした研修である。2つ目は、兵庫教育大学准教授の三宅浩司先生に、これまで研修で耕してきた自身の道徳的価値観に対する認識や捉え方を自主的な授業づくりに繋げていけるような研修を実施していただいた。3つ目は、大阪体育大学教授の高宮正貴先生に専門的知見や理論を御講義いただき、参加者自身の認識や実践上の課題を省察する時間として実施した。上記を行った結果、参加者自身が、研修が終わってからも学び続けるコミュニティを構築できるようにサポートできる段階までステップアップすることができた。以下、3つのパターンについて詳述する。

1つ目として取り上げている内容項目の検討を中核とした学び合いであるが、本事業の中核として位置づけており、年6回行った研修でも必ず行っている内容である。毎回、1つの内容項目を取り上げ、研修の前半～中盤を個人・グループで検討・吟味する時間に充てている。「自分自身に関すること」「相手や周りとの関係に関すること」「社会や集団との関わりに関すること」の3つの視点で構成された「Yチャート」に書き込みながら、参加者自身が普段抱えている道徳的価値観やエピソード、考えなどを自由にアウトプットし、互いの考えを聞き合うことを繰り返している。参加者は「もやもや」を抱きながらも、その「もやもや」こそが、道徳的価値の理解や判断について、子どもたちと議論する道徳を展開していく上で重要であることを徐々に認識される。加えて、グループ構成も工夫し、教員だけせなく、教員OB（管理職経験者）、学生、教育委員会関係者（研修センター等指導主事）、職能団体である道徳研究会メンバー、大学院生、大学生など多様な立場や背景を持つ者が同じグループに入り、経歴や年齢などの壁を無くし、フラットな立場で道徳的価値に関する自分の考えを出し合う場を創っており、これが自分自身の価値観を揺さぶられる大きな要因になっている。ややもすると、道徳研修は経験のある者が自分の経験や価値観を振りかざし、教える-教えられるの関係性を構築しようとする場になり、大学生や若手教員が敬遠してしまうことがあるが、本研修では必ず対等に学び合うことを大事にしており、リピーターを生む土壌作りができた。実際、研修が終わってからも立場を超えて考えを伝え合う場面がいつも見られるようになっている。講師である杉田先生も、1参加者として対等な立場でグループに入られ議論する姿があり、その様子がさらに参加者の学

びをより強固なものにしている。



(個人の考えを出し合う様子)



(あるグループの Y チャート)



(グループで吟味している様子)

2つ目・3つ目の特別講師を招いての研修は、本事業をより専門的知見から支援してもらうとともに、本研修自体の価値づけを行ってもらうことで、参加者のより深い学びに繋がれると想定して招聘した。三宅准教授、高宮教授に来ていただいたときも、前述した内容項目の検討は通常通り行っており、お二方には、その協議にも参加してもらったうえで、講演していただいた。

三宅准教授は 12 月 13 日に研修センターに来ていただき、多くの参加者に向けてご高話いただいた。前半の内容項目の検討で扱ったのが「感動・畏敬の念」であったことから、三宅先生は、教材「一つの花」を教材として用意していただき、先生自身が模擬授業を実演しながら、発問づくり・授業づくりのポイントについて、昨年度までの公立小学校教員時代のご経験を踏まえて伝えていただいた。参加者は前半に自分自身の内容項目についての考えをアウトプットした状態で臨んでいるため、通常の研修以上に深く主体的に理解を進めている様子が伺えた。

高宮教授には 1 月 24 日に愛媛大学教育学部に来ていただき、こちらも多くの参加者に対して、特にご自身の研究対象である「道徳的価値観の捉え方」を倫理的・哲学的に捉える重要性についてご高話いただいた。

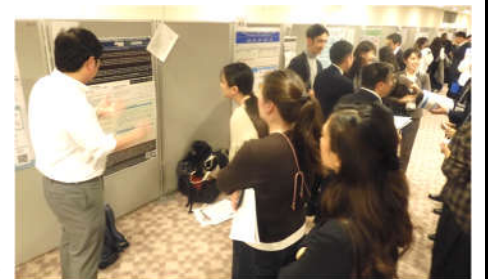
この日も、前半は通常通り参加者による内容項目「真理の探究」に関する協議をじっくり時間をかけて行った上で講演をしていただく形を取った。後半の講演では、この内容項目に関する教材「天から送られた手紙」を扱ってお話いただけたため、参加者にとっては、自分が授業実践する際の様子をイメージすることができ、どのように展開していけばよいかを考えながら聴くことができたので、より深い理解につながっているようであった。



(高宮先生の御講演の様子)

成果：

本事業の特徴は、様々なステイクホルダーが一堂に会し、職種や年齢を超えて道徳的価値観について話し合うことで、自身の内省や授業づくりに活かすことである。従来の研修観を問い直す成果と意義を形にするべく 11 月 12 日に広島で行われた国際学会「The World Association of Lesson Studies 2025」においてポスター発表に参加した。世界 136 개국から参加者が集まる中、多くの方に本事業の意義を発信し、日本の道徳教育に関する新しい研修の在り方について発信することができたのは、大きな成果となった。



(ポスター発表の様子)

発表に向けて今年度の研修に参加された教員にインタビューを行い、参加する意味や意義を確認する中で、改めて本事業の良さが浮かび上がったことも大きな成果として挙げられる。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き：

本事業では、NITS からの提案（第一次）の中でも特に、③豊かな気付きが醸成される学び、⑤学び合いのコミュニティを意識して実施した。多様な参加者が、その立場を超えて自身の道徳的価値観や倫理観を話し合う姿自体が、児童生徒にしてほしい考え議論する道徳の姿であり、学びの相似形そのものである。今年度は、成果を学会で発表するまで発展しただけでなく、他県に本研修の意義が伝わり、大分県から視察を兼ねて参加される方が表れるなど、研修自体が「成長」していることが分かる。申請者は松山市教育研修センター指導主事と協働で運営したが、本研修は主催者と参加者が共に創り上げるような雰囲気醸成されており、主催者としても楽しく意義深い研修となっていることに心から感謝するとともに、更に発展させようという意欲が湧くものとなった。

アイデアや工夫したこと：

- ・専門的な知見を持つ道徳教育や倫理学の研究者に複数回研修に参加していただくことで、質の高い学びを提供することができた。
- ・学生や教職大学院生も、愛媛県内各地の教員も参加しやすいように、実施時期や内容を考えて実施した。小学校だけでなく中学校の教材も扱うことで、中学校教員の参加も増えた。
- ・本研修の成果を発信すべく、授業研究の学会で発表したことは研修自体をエンパワーするものとなった。